

## 小児・乳幼児への新型コロナウイルスワクチン接種を推奨します

「子どもは新型コロナウイルスに罹っても重症化しない」ことが多いと言われていますが、新型コロナウイルスに罹り、重症化して死亡または後遺症を残した小児は、第7波の流行では明らかに増加しました。ほとんどは軽いカゼ症状で済みますが、なかには重症になる場合もあります。

新型コロナウイルスにはワクチンがあり、重症化を予防するため小児科学会でも推奨されています。インフルエンザと同様に、できるだけワクチンで予防しましょう。

\* 小児科学会の生後6か月以上5歳未満の小児への新型コロナワクチン接種に対する考え方

[http://www.jpeds.or.jp/modules/activity/index.php?content\\_id=466](http://www.jpeds.or.jp/modules/activity/index.php?content_id=466)

小児患者数の急増に伴い、以前は少数であった重症例と死亡例が増加しています。

成人と比較して小児の呼吸不全例は比較的まれですが、オミクロン株流行以降は小児に特有な疾患であるクループ症候群、熱性けいれんを合併する児が増加し、また、脳症、心筋炎などの重症例・死亡例も報告されています。

生後6か月以上5歳未満の小児におけるワクチンの有効性は、オミクロン株BA.2流行期における発症予防効果について生後6か月～23か月児で75.8%、2～4歳児で71.8%と報告されました。流行株によっては有効性が低下する可能性はありますが、これまでの他の年齢におけるワクチンの有効性の知見からは、重症化予防効果は発症予防効果を上回ることが期待されます。

生後6か月以上5歳未満の小児におけるワクチンの安全性については、治験で観察された有害事象はプラセボ群と同等で、その後の米国における調査でも重篤な有害事象はまれと報告されています。なお、接種後数日以内に胸痛、息切れ（呼吸困難）、動悸、むくみなどの心筋炎・心膜炎を疑う症状が現れた場合は、すぐに医療機関を受診し、新型コロナワクチンを受けたことを伝えるよう指導してください。

\* 新型コロナウイルス感染後の20才未満の死亡例に関する積極的疫学調査（第2報）

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/2019-ncov/-cfeir/11727-20.html>

2023年1月から9月の間に、新型コロナ感染で亡くなった20歳未満の方の数は62名であった。詳細調査をした50名では、基礎疾患がない児が半数以上で、幼児学童が多く、急性脳症、心筋炎等が主な原因であった。発症1日以内の死亡も多く、救急を受診の際にすでに心肺停止など重症化した例もあった。新型コロナワクチン接種は、接種対象年齢の26例中未接種が23例、2回接種が3例（全例12歳以上で、最終接種日から最低3ヶ月を経過していた。）

\* 小児科学会の5～17歳の小児への新型コロナワクチン接種に対する考え方

[http://www.jpeds.or.jp/modules/activity/index.php?content\\_id=451](http://www.jpeds.or.jp/modules/activity/index.php?content_id=451)

アメリカでの研究も New England Journal of Medicine で発表されています。

<https://www.nejm.org/doi/full/10.1056/NEJMoa2209367>